

登録作家は、今?!…

個展等を中心に作家の皆さんの創作活動をピックアップ!

小池 誠vs西田克也@スルガ台画廊

## 20年前、障害者アートバンクと出会えたことの 喜びと感謝の気持ちを 今後のアートビリティの発展のために伝えていきたい



1991年に第3回アートビリティ大賞受賞以来、長年にわたりアートビリティを支えてくださっている小池誠さん。小池さんは、アートビリティの登録作家であると同時に、1987年に第9回ケニア画廊新人展で、特別賞を受賞以来、精力的な創作活動と個展を中心に、独自の生命賛歌と宇宙観を、発信し続けている作家です。

一方、小池さんとは第3回障害者アートバンク大賞(アートビリティ大賞の前身)で出会い、画家とアートディレクターということで職業的な制約の違いこそあれ、表現者同志意気投合し、親交を深める西田克也氏。

今回はそんな二人にとってのアートビリティの意義や作家活動の原動力について語っていただきました。

この対談は2010年5月17日から22日まで東京の銀座スルガ台画廊で開かれた「小池誠展 (VOICE OF LIFE)」の会期中に取材させていただきました。

### 障害者アートバンクは、必死な僕の応援団だった

**西田** そもそも、小池さんはどのようなきっかけでアートビリティと出会ったのですか？

**小池** 僕が18歳の時、骨肉腫を発病して左足を切断し、20歳で左肺へ、28歳で右肺に転移して摘出手術をしました。骨肉腫になり、長い間生死の闘病生活をしたことで、私の人生は大きく変わりました。本当は建築家になりたかったのです。

当時、肺に転移した場合の生存率は数%の病気でした。生きている間に「自分はどうして生まれてきたのだろうか？自分の存在意義とは、生きるとは、宇宙の真理とは・・・？」等、少しでも知り、絵画や文章を通して表現したいと思いました。

山の中での闘病生活だし、こんな体ですし、学校にも行けません。独学で町の図書館に通ったりして、必死で学びました。

そんな想いで描いた絵が、第9回ケニア画廊新人展で特別賞を受賞し、審査員に個展の開催を勧められ、東京での初の個展を紀伊国屋画廊で開くことになりました。ちょうどそのころ、信濃毎日新聞で、障害者アートバンク（アートビリティの前身）のことを知り、連絡をとり、画廊で原画を見ていただきました。とにかく、全精力、全財産を投入しての個展だったので、何かを掴んで帰らなくてはと必死でした。

おかげさまで、個展では絵も少し売れ、アートバンクにも登録され、翌年には第3回障害者アートバンク大賞を受賞できました。アートバンクと知り合えたことは、収入面だけでなく、志を応援してくれる応援団を得られたという点でも本当に心強かったです。

## 感じるままの世界をストレートに表現できる才能

**西田** そうでしたか。当時はアートビリティではなく障害者アートバンクでしたよね。小池さんは、障害者アートバンクに登録されたときはすでに画家だったわけです。でも、僕が障害者の作品で初めて心を動かされたのは、ねむの木学園の知的障害者の作品です。だから、障害者アートバンクの作家といっても、太田利三さんや小池さんの絵は、僕にとっては既存のアートと変わらなかった。やがて、小池さんや太田さんと関わるうちに、お二人がそれぞれ障害を持っているからこそ、そこから生まれてくる表現があるのだということがわかってきたし、お二人の絵の原点が何かということも理解できました。その後、徳岡麻実子さんの作品や、さらに色々な方の絵が登録されるようになり、アートの世界に垣根がなくなったように、人々の心や社会も同様になればいいなと思えるようになりました。

**小池** そうですね。私も含め今の作家さんたちは、頭でいろいろ考えて受ける作品を描こうと作業します。考えすぎるあまり作品が硬くなり、かえって面白くなくなってしまいます。知的障害者の方たちは感じるままの世界をストレートに表現します。その作品には、素晴らしい才能を感じますね。私達も見習わなければいけないと思います。

**西田** そうそう。児童絵画も本当は素晴らしい表現が期待できるのに、大人の先入観をうえつけることによって、つまらない絵になっているでしょ。僕はアートビリティが事務局をしている『キラキラっとアートコンクール』という障がいのある子どもの絵画コンクールの審査員でもあるのですが、本当に子どもの、のびのびとした表現は、可能性の宝庫だと感じるよね。

## 10年かかって心の泥水が澄んだ水に変わった

**西田** 小池さんは、闘病と、独学の作家活動を通じ、迷い、悩み、学ばれていたということですが、自分流のスタイルを体得できた時というのは、どんな風にわかるのですか。

**小池** 闘病時代の最初の頃は、大人の書いたいろいろな本を読んで周りの評価を気にしながら描いたり、利益を考えて描いたりすることもありました。しかし、色々なことがだんだん分かってきて、自分の物差しとか、本能とか、感性で色々な物を見ることができるようになってきました。泥水を瓶に詰めてフタをして振ると、最初は濁っていた水も、時間が経つと澄んで向こうが見えてくるじゃないですか。そんな感じですね。

### まずは自分の作品を描くこと、それが個展開催の礎

**西田** それにしても、僕もグループ展を開いたことがありますが、毎年個展を開催し続けることはすごいエネルギーがいりますよね。アートビリティの作家さんの中には、個展に憧れてはいるものの、なかなか踏み切れない方も多いと聞いています。アドバイスいただけますか。

**小池** 志がある人は、大変かもしれませんがとにかく目標を持って必死でやることだと思います。まずは志をもって、何を表現したいのか、何を描きたいか、自分の気持ちが決まったらとにかく描きためることです。作品がたまってきたら、次に、自分の作品に共鳴してくれる方を探します。そして、共鳴してくれる方のもとで個展を開催できるよう努力します。当然個人でできればそれでも良いですが、最初は何も分からないので、なかなか大変です。

絵を描くという行為は、建築に似ています。まずは自分の中に基礎を作ること。自分をしっかり作ることが大事だと思います。



## 介護と創作活動

**西田** そういえば、この個展の準備中に小池さんのお母様が骨折されたとか。近年、アートビリティの作家の方々からも介護と創作活動の両立に悩んでいらっしゃるとの声を耳にします。小池さんはどのように介護と創作活動を両立しているのですか。

**小池** 手前味噌で申し訳ないのですが、私の家は信州の山奥の農家で、私の闘病時代も両親は忙しく働いていました。働かないと生活ができませんよね。それで老いた祖母のお世話をするのは私の役でした。今、母が動けなくなった。感慨無量なものがあります…。母がリュウマチでしたから父の世話も私がしました。両親には長い闘病時代に大変世話になりました。両親のお陰で生き延びられ、今の基礎を作る事ができました。本当に感謝しています。

介護は両親への恩返しですね。それをしないと人の道に外れるような、とても大切なものを見失うような気がしています。

今は介護サービスを利用できる福祉制度があります。だから、制度を目一杯利用して、一人で頑張り過ぎないように、自分のしたい事もある程度して、ストレスをできるだけためないように心がけています。

## 事務局より

冊子やポスター、Tシャツやカレンダーまで、さまざまなメディアの採用に応えられるバラエティ豊かな作品の宝庫、アートビリティ。

近年、とみに、自由奔放なパワー溢れる作品の応募や登録が多くなってきました。

その一方で、アートビリティを芸術的側面から支えてくださっているのが、小池さんや太田利三さんといった実力派の作家の方々です。

お二人は、現在、アートビリティ大賞の選考にも携わってくださっています。今後も、アートビリティの作家として、ご活躍を期待すると同時に、アートビリティの良心として私どもを見守ってください。





## 小池 誠

1957年 長野県下伊那郡喬木村に生まれ。建築の世界を勉学中18歳の時に骨肉腫を患い、左足切断。20歳の時に左肺に、28歳の時に右肺に転移し、摘出手術を受ける。闘病生活中から、アート、デザイン、エッセイ執筆活動を始め。

1987 年第9回ケニア画廊新人展「特別賞」受賞、

1990 年紀伊国屋画廊にて個展開催、

1991 年第3回アートビリティ大賞受賞。

以後、個展、受賞等多数。



## 西田克也

1977年 武蔵野美術大学基礎デザイン科卒業後、企業内デザイナーとして数社に勤務。1990年に独立し、(有)西田克也デザインオフィス設立。1991年、アートビリティに審査員として参加。以後、アートビリティ登録作品の審査に関わりながら、障害者アーティストの作品を使った商品デザインを数多く手がける。現在は、アートビリティのアートディレクターとして、さまざまな提案をおこなっている。